

恵 山

1 概況

22～24 日に実施した調査観測では、各火口の状況に変化はありませんでした。X および Y 火口ではやや活発な噴気活動が続いています。

2 過去の観測経過

恵山では 1972 年に気象庁火山機動観測班が初めて機動観測を実施して以来、1979 年以降札幌管区气象台地域機動観測班が 4 回（1979 年、1989 年、1993 年、1998 年）観測を行ってきました。今回の観測は 1998 年以来 5 回目となります。また 1967 年から 1985 年にかけて、函館海洋气象台・森測候所（当時）による観測の記録が 6 回あります。

恵山溶岩ドーム西側に位置する X・Y 両火口ではこれまで 200 前後の噴気温度が定期的に観測されています。今回の観測においても Y 火口東壁で約 220 の噴気温度を観測しており、観測開始以来約 40 年間噴気活動に大きな変化はないものと考えられます。



恵山山頂周辺図

3 調査観測の結果

【X火口】

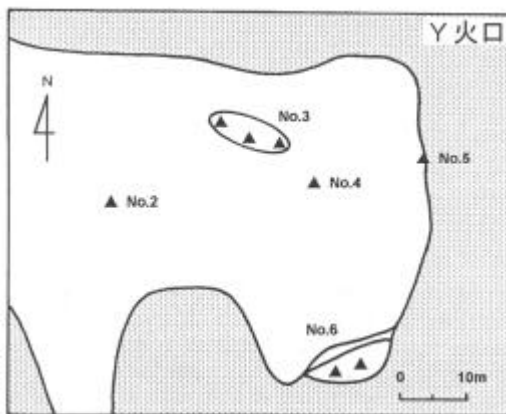
火口底の複数の噴気孔から白色の噴気を勢いよく噴出していました。噴気には弱い刺激臭が認められました。噴気温度は 100～150 前後で、長期的にはやや低下する傾向が見られます。赤外熱映像装置*による観測では、火口底の活発な各噴気孔に対応した高温域が認められました。

【Y火口】

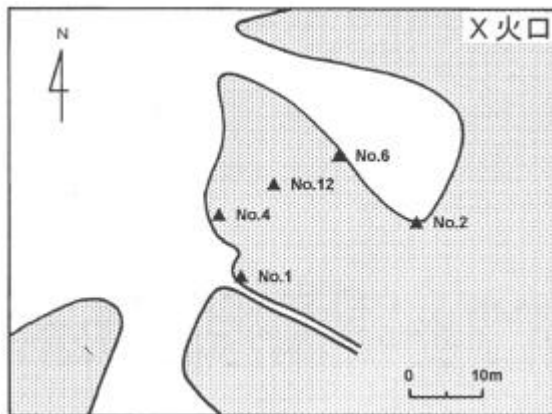
火口底および東側火口壁の複数の噴気孔から、やや強い刺激臭を伴う白色の噴気を勢いよく噴出していました。火口底の噴気温度は 130 前後で、前回の 1998 年と比べて大きな変化はありませんが、長期的には X 火口同様、やや低下する傾向が見られます。しかし、東側火口壁で約 220 の噴気温度が確認されており、Y 火口全体としては活発な熱活動が続いていると考えられます。赤外熱映像装置*による観測では、東側火口壁中段および上段の活発な噴気孔に対応した高温域が認められました。



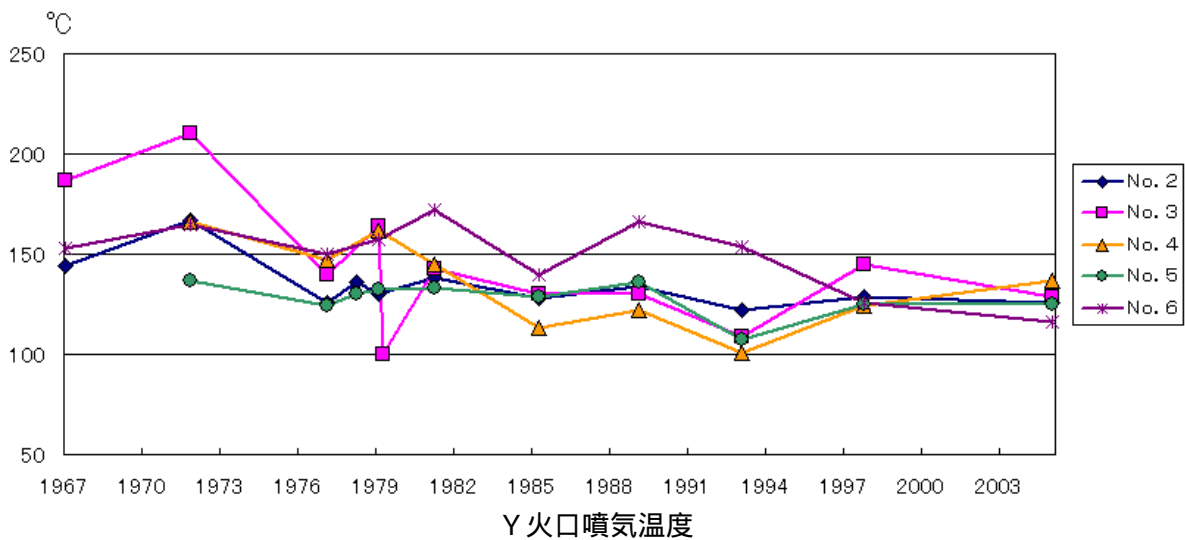
西側から撮影した恵山溶岩ドーム



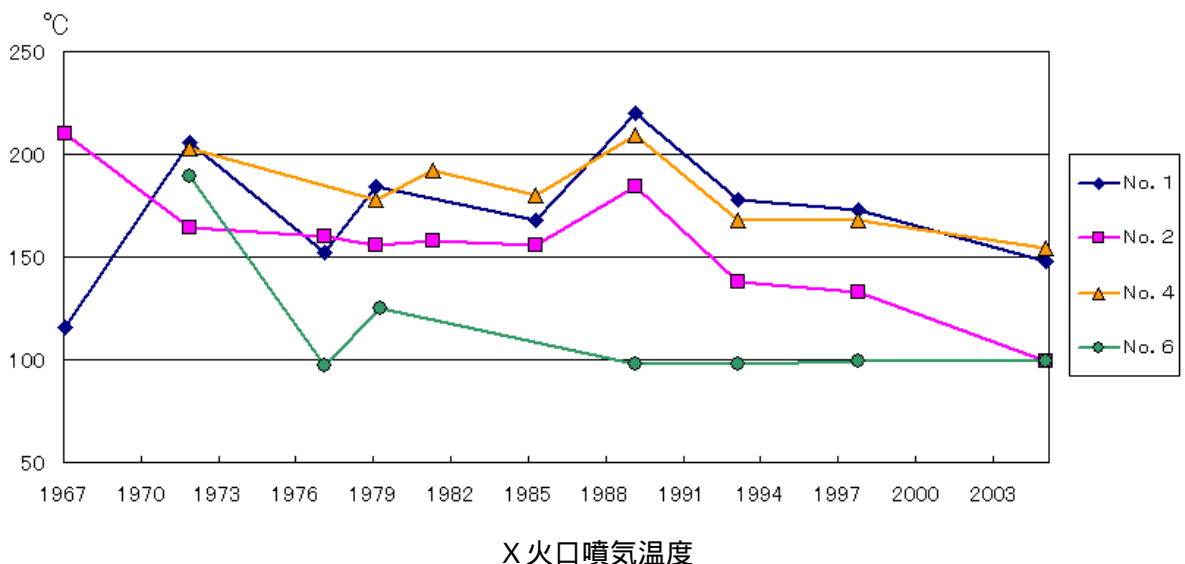
Y 火口底の主な噴気孔



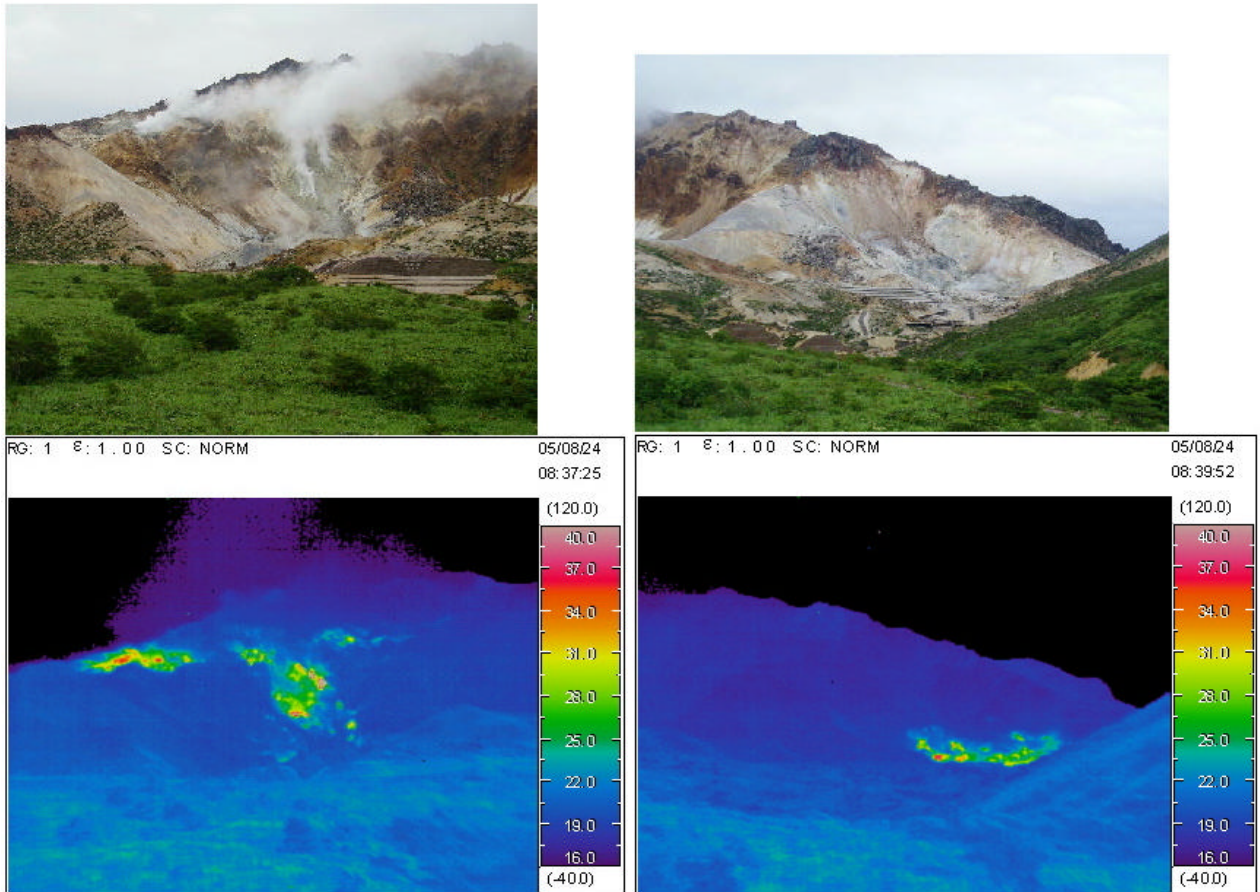
X 火口底の主な噴気孔



Y 火口噴気温度



X 火口噴気温度



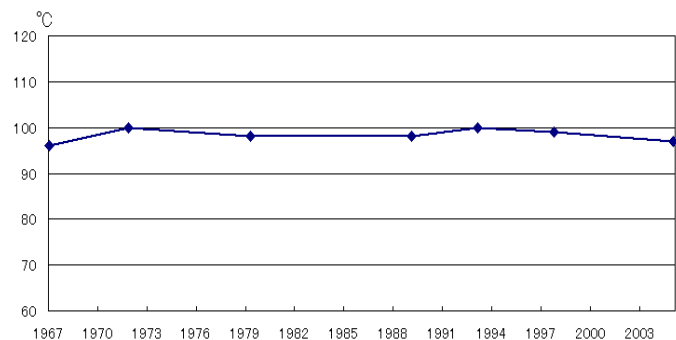
西側から赤外熱映像装置により測定したXおよびY火口の表面温度分布
(8月24日撮影 左: Y火口 右: X火口)

【Z噴気地帯】

灰白色の変色域の一部からごく弱い噴気が認められました。噴気温度は97 で過去の測定値と変化ありませんでした。



Z噴気地帯(南側のドーム中腹から撮影)



Z噴気地帯温度

* 赤外放射温度計や赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を感じて温度を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、熱源から離れるほど測定される温度は実際の温度よりも低い値になってしまいます。また、噴煙や霧で測定対象が見えにくい場合には温度測定ができないこともあります。